

英語 Phonix の例外に対する考察 (1)

—‘flat A’ と ‘broad A’ について—

小山良一*

(平成12年10月31日 受理)

A Study on the Exceptions to ‘Phonix’ (1)

—Distribution of ‘Flat A’ and ‘Broad A’—

Ryoichi KOYAMA *

It is often said that in the English language, the pronunciation does not exactly correspond to the spelling, and in a way it is true. But it is also true that under the surface of anomalous relationship between the pronunciation and the spelling, there do seem to exist some clear rules, though with many exceptions. ‘Phonix’ is the pedagogical concept and practice to make students notice those rules and, by using the rules, to enable them to pronounce the words that are new to them.

Although there are a number of exceptions to the rule of pronunciation, it is because some ‘sub-rules’ have operated to generate them. In this article the author tried to clarify such ‘sub-rules’ in the case of what is called broad A and flat A.

In the 18th century in the phonetic context, (C)aC, the vowel, which had been /æ/ in the early modern English period, was lengthened and changed to /ɑ:/, but not all of the words in the same phonetic environment. Some factors must have retarded or prevented the change. The objective of this paper is to find out those preventive factors.

1. 英語 Phonix と spelling

現代英語は spelling が発音と必ずしも一対一の対応をしておらず、ある文字や文字列が2通り以上の発音を表したり、同じ発音が別な文字や文字列で表されることは、学習者が spelling を記憶するのに負担となるばかりでなく、misspelling の大きな要因ともなっている。たとえば、root と route の母音は同じであり、/i:/に至っては deep, be, sea, Caesar, people, amoeba, receive, believe, machine, key, quay と実に11通りもある¹⁾。

しかしながらこの様な一見でたらめな spelling にもかなりの規則性が内在しており、現に欧米の英英辞典でも、現在は国際化が進んだため発音記号が用いられているが、古い版では文字に記号を付しただけで発音を表記していた²⁾。従来のややもすると発音と spelling の例外を強調しすぎた点を是正し、規則性に着目させることで外国語として英語を学ぶ学習者に native と同じように、初めて見た単語でも規則に従って発音できるようにしようというのが phonix の試みである。

* 英語 助教授

一例を示すと、単母音字+単子音字+e という組合せでは、母音字はその文字の読みと同じになるが、(phonix では長いという)、e がない場合は短く発音される。(Table 1)

(Table 1)	phonix の表記
hat [æ] – hate [ei]	hăt – hâte
pet [e] – Pete [i:]	pět – Pēte
hid [I] – hide [aI]	híd – hīde
rod [ɑ / ɔ] – rode [ou]	rőd – rōde
cut [ʌ] – cute [ju:]	cůt – cūte

無論前述のように英語の spelling と発音の間には例外が多数存在するため、全ての単語を規則化することはできないが、この方法は、ある程度の規則性に対する認識を学習者に与え、ある文字に対応する発音が一定であることからその文字に対する正確な発音に習熟させ、また多音節語でもこの記号を付すことにより発音記号を用いずに発音を表記できる、という学習上の利点がある。

一方教授者側は規則の把握と共に例外の原因・理由についてもある程度の知識が望ましい。英語史の文献には、音変化の例としていくつかの例が散在するが、現代英語の発音と spelling の規則からまとめてあるものはないので、言わば「例外の規則」といったものを順次探っていく予定であるが、本論では所謂 flat A と broad A³⁾の分布について考察を試みた。

2. flat A と broad A

表1で分かる通り、単母音字+単子音字 ((C+)V+C) という文字列では母音字 V は短く発音されるのが規則であるが、母音字が a の場合 ((C+)a+C)、後続の C の音が無声摩擦音 (voiceless fricatives) /f, s, θ/ である場合は、イギリス標準音 (Received Pronunciation 以下 RP. と略記) で /ɑ:/ と発音される語がかなりの数にのぼる。この現象の原因・理由を探るのが本論の目的であるが、方言まで含めると音の相違は限りがないので、あくまでも英米の標準音を対象とし、Daniel Jones: English Pronouncing Dictionary 15th edition, 1997 と Oxford English Dictionary 2nd edition, 1991 に基づいて分析を行った。

3. /A/の長音化

OE. /ɑ:/ は ME. では既に円唇化され /o:/ となり、14-17 世紀に起こった大母音推移 (the Great Vowel Shift) を経て ModE. /ou/ となっており、ModE. /ɑ:/ の直接の起源ではない。

OE. ham — ModE. home, OE. ban — ModE. bone, OE. rap — ModE. rope 等

Early Modern English では /ɑ:/ という音素は存在せず⁵⁾、現代英語標準音での /ɑ:/ は次の4つの場合に由来する。

- (1) ME. a [a] に lf, lv, lm が後続する : half, salve, calm など⁴⁾
- (2) ME. a [a] に無声摩擦音が後続する : staff, ask, bath など
- (3) ME. a [a] に r が後続し、その後母音が続かない : barn, far など
- (4) ME. a [a] が鼻音の前で au に変化し、18 世紀に /ɑ:/ と発音されるようになった方言形

が標準音になった : aunt, dance, example など⁶⁾

(1)の場合は、中島⁷⁾によれば、small や salt のように al の後ろに母音が続かない語は [l] の前にわたりの音が発達して [aul] となり ModE. [ɔ:] となったが、hallow や valley のよう後ろに母音が続く語は長音化せずに [æ] となった。そして [aul] になったものの内 [f][v][m] の前で [l] が脱落し (寺沢他⁸⁾によればその時期は 15 世紀初)、さらにわたり音 [u] も脱落して a または a となり、a は (2) と同様に長音化し、a は [æ:] を経て 18 世紀後半に [ɑ:] に変わったものである。calm, palm, psalm のような -alm で終わる語は RP., General American (以下 GA.) 共に [ɑ:] であるが、half, halves, calf, calves, salve は RP. では [ɑ:] であるが GA. では [æ] となっている。

(3)は、Wells(1982)⁹⁾によれば、15 世紀に England 北部、東部で始まった、語尾または「r+子音」という環境で ME. /ɪ/, /ɛ/, /ʊ/ が /ɔ/ に変化した (Wells の用語では First Nurse Merger) 語と同様に、17 世紀に r の前で長音化が起こり (Pre-R Lengthening) その後 r が脱落したため /ɑ:/ になったと説明されている。なお Barber(1995) では、r の弱化は 16 世紀以前に始まり 18 世紀半ばまでには RP. で消失したとされている。この環境で r が保持されている英語は rhotic, r が消失したものは non-rhotic と呼ばれ、GA. は前者、RP. は後者で、両方言の特徴の一つとされている。

(2)は ME. /a/ と /ɒ/ に起こった現象であるが (Pre-Fricative Lengthening), Barber(1995) と Wells(1982)によれば、ME. /a/ は 17 世紀には既に /æ/ に高められており、それが /æ:/ から /ɑ:/ を経て /ɑ:/ になったとされている。長音は当初は単に /æ/ の異音であったものが独立した音素となったもので、17 世紀に始まり 18 世紀に流行した。しかしながらこの所謂 broad A は RP. のみで見られ GA. では flat A が保持されている。

(4)は、主として ME. 期にフランス語から借用した語に見られ、dangerous のように ME. で鼻音の前で au となったものが [ɔ:] にならずに [ɑ:] になった方言形が 18 世紀に標準形に入り込んだものである。

4. アメリカ英語の保守性

前節で述べたように ME. /a/ は幾つかの環境で /ɑ:/ に変化しているが、それらは RP. での現象であり GA. では 17 世紀以来の /æ/ が保持されている。これは /ɑ:/ への移行が主に 18 世紀に起こったもので、17 世紀にイギリスからの植民が始まったアメリカではイギリスとのつながりが強かった New England 地方等を除いてはその影響が及ばなかったためである。従って GA. には RP. よりも古い発音が残されているが、これは合衆国独立の機運が言語にも影響したことにもよる¹⁰⁾。

5. flat A と Broad A の分布

5.0 GA. だけを取り上げれば (C)+ a + C(C) の環境では全て /æ/ になるので問題はないが、同じ環境で RP. では /æ/ で発音されるものと /ɑ:/ で発音されるものがある。Wells¹¹⁾ には /ɑ:/ になるものとして以下の語が挙げられている。

(a) staff, giraffe,

path, lath,
 brass, class, glass, grass, pass,
 raft, craft, graft, daft, shaft, aft, haft, draft,
 clasp, grasp, rasp, gasp,
 blast, cast, fast, mast, aghast, last, past, contrast, vast, avast,
 ask, bask, mask, flask, cask, task,
 after, rafter, Shaftesbury,
 master, plaster, disaster, castor, pastor, nasty disastrous,
 basket, casket, rascal,
 fasten, raspberry, ghastly, castle,
 laugh, laughter draught;
 dance, advance, chance, France, lance, glance, enhance, prance, trance,
 entrance (v.)
 grant, slant, aunt, chant, plant, advantage, vantage, chantry supplant, encant,
 branch, blanch, ranch, stanch, stanchion,
 demand, command, remand, slander, chandler, commando, Alexander, Sandra,
 Flanders,
 example, sample,
 chancel, chancellor, Frances, Francis, lancet, answer;
 calf, half, calve, halve, rather, Slav,
 shan't, can't
 Iraq, corral, morale, Iran, Sudan, banana.
 (b) GA. では/æ/であるが RP. では/æ/と/a:/の揺れが見られるもの
 chaff, graph, alas, hasp, Basque, masque,
 plastic, drastic, elastic, gymnastic, (Cornish)pasty, enthusiastic, bastard,
 paschal, pastoral, masculine, masquerade, exasperate, blasphemy,
 masturbate,
 Glasgow,
 lather, stance, askance, circumstantial, intransigent, substantial, transit,
 transport, transfer, transform, transitory, transient, transept, and other
 words in trans-;
 contralto, alto, plaque, Cleopatra.

これらの語は、Wells¹²⁾では、18世紀半ばにはまだ calm, palm 等の語では[a:], start, car などでは[a:r], bath の類では[æ:] (音素的には/æ/で、まだ異音の段階)であったものが20世紀までに RP. では全て/a:/に変化したと説明されている。そして同じ音環境にある全ての語が変化したわけではなく一部の語は従来の/æ/を保持している。Wells はこれを TRAP-BATH Split と名づけているがその詳細・原因は不明としている。しかしながら、言語における変化は様々な要因が絡み合うので例外はつきものであるが、詳細に検討する

とある程度の傾向といったものが見えてくるので、以下 Wells の分類に従って検討を加えていくことにする。

5.1 -f# (/f/で終わる語) (*印の語は Wells が挙げている例、以下同様)

(1)Current RP. で[ɑ:]と発音される語 : *staff, *laugh, *giraffe, *calf, *half, graf, haaf, pilaf, chaff, daff (= do off), behalf, draff, graff, epitaph, graph

(2)Current RP. で[æ]と発音される語 : *gaff, *gaffe, *chiffchaff, kenaf, Waaf, Wraf, baff, caff, charshaf, daff (< daffodil), faff, naff, riff-raff, schlaff, Taff, yaff, raffe, piaffe, paraph, staph

第1の要因と考えられるのは, familiarity の差である。両語群を較べると(1)の語群には(2)より日常よく使用される語ははるかに多い。逆の言い方をすると(2)の方は, ある分野だけで使われる専門語や方言形が多いと言える。schlaff はゴルフ, piaffe は馬術の用語であり, chiffchaff は鳥の名前で staph はバクテリア名であり, faff は OED によると dial. and colloq. とある。第2の要因と考えられるのは外来語である。(1)の語群に graf, pilaf とあまり身近でない語が含まれているが, graf はドイツ語, pilaf はトルコ語からの借入で, このような語は GA. でも[ɑ:]であり, まだ外来語と感ぜられるため元の言語の音を採用していると思われる。第3の要因としてはその語が使用され始めた年代である。(2)の語群の中で OED の引用の初出が 19 世紀以降のものは[æ]になっている。それらは kenaf (1892), caff (1931), daff (< daffodil) (1915), naff (1969), Taff (1928) (括弧内数字は OED 初出年) である。このことは 18 世紀に起こった /ɑ:/への変化が少なくとも 19 世紀後半には停止していることを示している。第4の要因は略語である。daff のような略語や acronym は第3の要素とも重複するが総じて /æ/ になっているものが多い。第5の要因は, a の前が gr-, gl-, dr-, cl-, cr- のように子音結合をなしているものが多いということである。はっきりした原因は不明であるが, このような子音結合がなんらかの影響を持っていたと考えられる。

5.2 -fC (/f/の次に子音特に t が続く語)

-ft(-)の結合を持つ語は全て[ɑ:]の発音を持つ : *craft, *shaft, *after, *laughter, aft, baft, daft, draft, draught, graft, haft, kraft, raft, waft, rafter, Shaftesbury, *Taft

上記の語は Jones15¹³⁾では GA. で全て /æ/ であるが, kraft だけは OED では /ɑ:/ のみが与えられている (他は OED では [ɑ:] と [æ])。Taft は Wells では RP. で [æ] を持つ例として挙げられているが, Jones15 では他の語と同様 RP. [ɑ:] とされている。waft は /w/ の影響で円唇化された [ɒ] もあるが, これは /w/ を持つ語に共通である。

-fC の環境でも C が t 以外の場合は [æ] になっている (naphtha, naphthalene, saffron; raffle, baffle, snaffle, waffle, yaffle など) ので ft という子音結合が強い影響力を持っていたことがわかる。

/f/ に母音が続く場合は, chaffer のように 5.1. の(1)の語に -er が付いた派生形を除いて [æ] である。gaffer, zaffer; graffick, maffick; raffia, raffish, scaffold, taffy, traffic など。なお mafia は Jones15 も OED も両方の発音を挙げており揺れが見られる。

5.3 -θ#

(1) current RP. で [ɑ:]: *path, *bath, lath, math「刈取り」(< aftermath), rath (= rathe)

(2) current RP. で [æ]: *math(s) (< mathematics), *hath (< have), *strath, bath (へ
ブライ語の度量衡単位), polymath, psychopath

ここでも(2)群は、専門語: polymath, psychopath, 略語: math(s), 外来語: bath, である。なお hath は have の音が保持されたと思われ, strath は理由は不明だが str- という結合の場合 [æ] になっている (strass も同様)。

wrath, swath の場合 /w/ の影響で円唇化された [ɒ] もあるのは waft の場合と同じである。

5.4 -st

-st の子音結合も強い影響力があり, -st で終わる語は殆どが [ɑ:] になっている: *last, *past, *mast, blast, cast, caste, fast, vast, avast, aghast, contrast

Wells には hast と bast が [æ] の例として挙げられているが, hast は hath と同じ理由であり, bast は OED では他の語と同じに [ɑ:] [æ] 両者が挙げられている。なお -ast で終わる派生語は弱音の [ə] または [æ] である: enthusiast, gymnasiast, bombast など。

また -blast で終わる複合語は殆どが専門用語であり Jones15 には採録されていないものが多く, OED に記載されているものは 2, 3 の例外を除くと弱音の [æ] である: parablaster, ameloblast, odontoblast など。(epiblast, idioblast, biblioblast は [æ] と [ɑ:] であるが SRD¹⁴⁾ で実際の音声を聞くと両群とも [æ:] に近く, 差はないように思われる。)

-st に母音が続く場合, -ic, -ise のように i が続く場合は [æ] になる: blastic, clastic, mastic, nastic, spastic, chastise など。drastic, elastic は Jones15 では [ɑ:] (US. [æ]) であるが OED では [æ] のみである。

-er, -or 等が続く場合は familiar な語と unfamiliar な語とで差が見られる: *master, *disaster, plaster, Pasteur, alabaster, bastard, castor, pastor, pastoral, pasture 等は [ɑ:] であるのに対して, canaster, oleaster, petaster, piaster, pilaster は [æ] である。なお alastor は Jones15 には採録されていないが OED は rare であるとしながら [ɑ:] [æ] の両者を挙げている。Jones15 には Alastor があり, こちらは [æ] になっている。Wells では aster, Astor, raster が [æ] の例として挙げられているが, aster は Jones15 では [æ] のみになっているが OED は [ɑ:] [æ] の両者を挙げている。Astor は Jones15 で [æ], OED には採録されていない。raster は Jones15 にはなく OED で [æ] であるが初出は 1904 年である。

-asty で終わる語は少数で *nasty と vast の派生語 vasty は [ɑ:] であるが, tasty, wasty はそれぞれ taste, waste の派生語で母音の発音は [ei] であり, dynasty は強勢がなく [ə] である。

5.5 -sp, -sk

この 2 つの組合せも殆どの場合 [ɑ:] である。

-sp: *clasp, *grasp, *rasp, *gasp, hasp; aspen, gasper, raspberry, jasper

Wells は asp を [æ] の例で挙げているが, Jones15 [ɑ:], US [æ], OED [ɑ:, æ] である。また aspirin は [æ] であるが, OED 初出が 1899 年であり, asphalt は強勢のない音形もあ

る。

-sk : *ask, *flask, *mask, bask, Basque, cask, lasque, masque, task; *basket, *casket, flasket, lasket, Pascal, paschal, rascal, exasperate 等全て [ɑ:]

例外は *Ascot, *mascot, *Aske, *casque, *gasket, masculine, Alaska であるが, Ascot, Aske は固有名詞, mascot, Alaska は OED 初出がそれぞれ 1881 年, 1882 年である。casque は Jones15 によれば RP. でも [ɑ:, æ] の両方がある。gasket, masculine については原因は推測できない。

5.6 -s#

この音で終わる語は非常に多く, 説明の困難なものもあるがやはり一番の要素は familiarity の差であると思われる。

(1) current RP. で [ɑ:] : *pass, *glass, *grass, *class, *brass, alas, czardas, czardas, gravitas, bass, tass, trass, kavass, kvass, classy

(2) current RP. で [æ] : *gas, *lass, *morass, *amass, *mass, *cuirasss, *crass, *bass, *mass, *ass, baas, vas, yas, ACAS, hipporras, monas, sassafrass, sass, Tass, frass, strass, wrasse

(1) の語群のうち familiar でない czardas, czardas, kavass, kvass は全て外来語であり, kvass などは GA. でも [ɑ:] なので元の言語音にならったものと考えられる。trass は OED では [ɑ:, æ] が与えられているが Jones15 では [æ] のみである。bass は Wells では全て [æ] とされているが OED では bast から変化した bass 「木の繊維」は [ɑ:, æ] の両方があるとされており, -st のために長音化したかあるいは同音意義を避けたのかも知れない。この意味による違いは mass にもあてはまり, Wells は全ての意味で [æ] としているが, OED ではカトリックではしばしば [ɑ:] であると記述している。Barber (1995) は ass も arse との混同を避けたのではないかと述べている¹⁵⁾。なお bass は「低音」の意味の時は [eɪ] である。

(2) の中では, 外来語の痕跡を残していると考えられるものが baas (Dutch), das (Afrikaans), Tass (Russian), sassafras (Spanish), cuirass (French) であり, gas が familiar な語にもかかわらず [æ] なのはオランダ人の化学者 (J. B. Helmont) がこの語を使用し始めたことと関係があるかもしれないが確証はない。yas (= yes), sass (= sauce) は Black English 又は American Slang である。frass は OED 初出が 1854 年と新しく, ACAS は acronym である。strass は strath と同じで理由は不明だが str- の後は [æ] になっている。

-st (5.4) と同様, /i/ が後続する場合は [æ] が普通である : classic, classical, classify 等。acid もこの中に入るであろう。

lass は alas の aphetic form である las [ɑ:, æ] との混同を避けたのかもしれない。

5.7 -st, -sn

*castle, Newcastle; fasten が [ɑ:] で, [æ] の例は *tassel, *hassle, *vassal, tassle, passel; *Masson で familiarity の差は歴然としている。

5.8 -ns

(1) current RP. で [ɑ:] : *dance, *chance, *France, *answer, *chancel, chancellor, chancellery, Frances, Francis, glance, hance, enhance, lance, lancer, lancet, prance

stance, trance, entrance (v.), transfer, translate, transmit, Vance, advance, askance

(2) current RP. で [æ] : *manse, *romance, *expanse, *cancer, *cancel, *fancy, franc, francium, ferdelance, nonchalance, nance, sans, spancel, nuance

これらの語はほとんどが過去にauのspellingを持っており、フランス語・ラテン語からの借入語が多い。(2)の語群にはfranc, ferdelance, nonchalantce, sans, nuanceなどは、鼻音/ã/も使用されている。(2)群でpopularな語は, romance, expanse, cancel, fancyであるが, romanceはOED2によるとMEにおいては第一音節にstressが置かれるのが普通であったとのことであるのでその影響かもしれない。expanseは動詞がexpandであり, -andの語尾を持つ語は一部例外を除くと長音化しない傾向が強いのでそのためではなかろうか。またもう一つの名詞形のexpansionも[æ]であり, mansion, scansionなど/s/が続く場合も長音化しないのが普通である。fancyはfantasyの短縮形である。cancelはchancelと同根語であり, 意味の違いが関連しているかもしれない。

5.9 -nt

(1) current RP. で [ɑ:] : *grant, *slant, *aunt, can't, shan't, chant, enchant, plant, aslant, confidant; *advantage, vantage; *chanter; chantry

(2) current RP. で [æ] : *rant, *ant, *cant, bant, Brabant, decant, recant, pant, brant, scant, descant, levant, gallant; *banter, *canter, *antic, gallantry, pantry

(2)の語はcant, extant, pant, scant, descant, gallantを除いて-auの形にならなかった語であるが, descant, extant, gallantとgallantryは第1音節にstressがくる場合もある。scantはON. skamt起源でOEDによると16世紀にskaunteという語形があり, cantも15-18世紀にkauntという語形が存在したが, このkのspellingが何らかの影響を持っていたかどうかは不明である。pantも16-17世紀にpauntという語形が存在し, 長音化しなかった理由は不明である。

なおgantryはJones15では[æ]になっているが, OEDではgantryの異形として[ɑ:]と[ɔ:]の両方が認められており, gantもJones15には採録されていないがOEDではgantryと同様gauntの異形の扱いである。-auntの語尾を持つ語は[ɑ:]と[ɔ:]の両方が認められているもの(haunt, jaunt, avaunt)と[ɔ:]のみが認められているもの(daunt, taunt, romaunt, flaunt)があり, daunt, vauntはUS. で[ɑ:]とされている。

pedantry, infantry, pheasantry, peasantryなどは-antryの部分にはstressが無い。

5.10 -ntʃ, -nʃ

Wellsは語尾が-chのもの-tionのものを一緒にして, -n(t)ʃという項目にしているが, 語形も発音も異なるので別々に考えた方がよいと思われる。

-ntʃ: *branch, *blanch, *stanchion, flanch, planch, planchette, ranch, stanch, hanch, cranch

この群は全て典型的なRP. で[ɑ:]と, GA. では[æ]と発音されるグループである。(ただしstanchには[ɔ:]もある。)

-nʃ-: *mansion, *expansion, *scansion

Wellsはこれらを上の-ntʃのグループの対照群としているが、上記の理由でここでは別に扱うべきである。そして、-nʃ-の子音結合を有する語では常に[æ]である。

5.11 -nd

(1) current RP. で[a:] : *demand, *command, *remand, *slander, *commando, Alexander, Flanders, Sandra, chandler, sanders, Cassandra, Alexandra, reprimand

(2) current RP. で[æ] : *stand, *grand, *hand, *gander, *panda, *glissando, and, land, meander, abandon等

このグループでは、AlexanderやFlandersといった人名や地名を除くと、andをはじめとしてむしろ[æ]の方が主流であり、grand, abandon等の例外はあるものの、多くはhand, land等本来語つまりゲルマン系の語である。そして(1)群は全てラテン系の語彙である。しかし何故一部の語が[æ]になったのかは不明である。

なおglissando, accelerando, ritardando等の音楽用語はRP. では[æ]であるが、GA. ではイタリア語の音をそのまま取り入れた[a:]の方がむしろ多い。

5.12 -mpt

この語尾を持つ語は[a:]の発音が標準とされるものは*example, *sample, [æ]が標準とされるものは*ample, *trampleである。いずれもラテン系の語彙であり、過去に-auのspellingを持つ点で同じであり、発音が異なる要因は不明である。

6. まとめ

同一の音環境にありながら何故flat Aとbroad Aに発音が分かれるのか調べて来たが、GA. ではほぼ全てflat Aであることから分かるように、broad Aへの変化は言語内にその必然性が存在したというよりはむしろ言語外の要因が強く働いたことによるので¹⁶⁾、断定はできないが結論的には次のことが言えるのではないかと考える。

1. voiceless fricatives, /s/, /f/, /θ/の前のaの場合、身近な、日常良く使われる語は長音化して[a:]になったが、いくつかの要因がその傾向を阻害した。その要因は

(1) ある分野の専門語や学術語であるため日常的に使われないこと。

(2) 長音化は18世紀に流行したがその後作用しなくなったため、19世紀以降の外来語には働かなくなった。

(3) 18世紀以前の借入語でも英語に同化していない、つまり外来語と感じられていた語は本来の言語音を留めた。

(4) 短縮語やAchronymは長音化しないものが多い。

(5) 同音異義語を避けるために長音化が阻害されたかもしくは元の短音に戻された。

(6) gl-, gr-, cl-, cr-; -st, -ftの子音結合が長音化を促進した。

(7) なおvoiceless fricativeでも/j/の前では長音化されない。

2. -an+Cの場合、上記の要因が作用したが、これらの語の音は始め標準音でなかったためかなりの例外が認められる。

参考文献・注

- [1] 児馬修：ファンダメンタル英語史. ひつじ書房. (1996) 96
- [2] 例えば COD は 9th edition (1995) では the International Phonetic Alphabet (IPA) による発音表記になっているが、6th edition (1976) では bāt のように文字に記号を付した表記になっている。
- [3] flat A はイギリスでは trap のような語の母音を [ʌ] のように発音することを指し、broad accent とは標準から外れた発音のことを言うが、アメリカではしばしば /æ/ と /ɑː / を指して用いられる。(Accents of English 1. Cambridge. (1982) 134)
- [4] 中島文雄：英語発達史. 岩波全書 (1951) 110
- [5] Barber, C : The English Language. Cambridge. (1995) 211, 新英語学辞典. 成美堂 (1982) 392. なお ME. /ɑː/ は 15 世紀 /æː/, 16 世紀 /ɛː/ を経て ModE. /ei/ となっている (name, make など).
- [6] Barber, C (1995) 244
- [7] 中島文雄：英語発達史 (1951) 110
- [8] 寺沢芳雄他：英語語原辞典. 研究社. (1997) 611
- [9] Wells, J.C. : Accents of English. (1982) 193-203
- [10] Baugh, A.C. : A History of English Language 2nd ed. Routledge and Kegan Paul. (1959) 422
- [11] Wells, J.C. : Accents of English. (1982) 135
- [12] *ibid.* 232-234
- [13] Daniel Jones: English Pronouncing Dictionary 15th ed. Cambridge. (1997)
- [14] 小学館ランダムハウス英語辞典 CD-ROM 版
- [15] Wells, J.C. : Accents of English. (1982) 232, また -ŋk の結合を有する語も常に [æ] である。
- [16] Blake, N. F. : A History of the English Language. Macmillan. (1996) 258 には, Dr. Johnson が great の発音について, 当時 state の母音と同じ発音の場合と meet の母音と同じ場合と 2 様の発音が存在していることを Boswell にこぼしていたことが紹介されている。